

アイヌ語十勝方言の助詞

学位論文内容の要旨

本論文は、アイヌ語十勝方言（本別方言）を、話者（沢井トメノ氏、1906 年生）との 5 年間にわたる実地調査によって、特に助詞に重点を置いて記述したものである。なお、本論文は、400 字詰原稿用紙換算 583 枚の分量である。

序章ではアイヌ語の研究における十勝方言の位置付けと、本論文で扱う「助詞」の定義を先行研究の検討に基づいて行い、助動詞、後置副詞も広義の助詞として扱うことを述べ、併せて助動詞的な機能を果たす連語的表現も対象とすることを述べる。また、資料と表記についてもふれる。

第 1 章では、アイヌ語の助動詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の助動詞を純粹の助動詞と、助動詞的に用いられる動詞とに分類し、さらに意味、機能によって「時間表現(a, rok, ...a...a, nisa, awan, kuski)」、「推量表現(nankor)」、「当為表現(kun)」、「意志表現(kuski, nankor)」、「願望表現(rusuy)」、「受益表現(manu)」、「程度表現(kaspa)」、「否定表現(somoki)」、「命令表現(nankor)」、「助動詞的形式として用いられる動詞」に分けて、個々の形式の用法を実例に基づいて記述し、また、この分類に入れにくい少数の形式についても記述している。

第 2 章では、アイヌ語の格助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の格助詞を意味、機能によって「位置・方向(ta, en, wa, peka)」、「様態(ne, koraci)」、「限定(pak, pakno)」、「程度(pakno)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。

第 3 章では、アイヌ語の後置副詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の後置副詞を意味、機能によって「位置・方向(pekan, osi, osken, kasiken)」、「道具・手段(ari)」、「共同(tura, turano)」、「原因・理由(kus)」、「様態(nepkon)」、「意志(renkahine)」、「数量(opitta)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。

第 4 章では、アイヌ語の副助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の副助詞を意味、機能によって「提題(anak, anakne)」、「例示

(ene)」、「追加(kay, ka, usa)」、「並列(newa, ene, kay, ka, usa)」、「限定(pokay, patek, keraypo, pak, pakno)」、「不定(kay, ka)」、「否定(kay, ka)」、「文全体のモダリティーに関係する副助詞(estap, etap, tap)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。

第5章では、アイヌ語の接続助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の接続助詞を意味、機能によって「時間表現(wa, tek, kan, ahinne)」、「原因・理由(kus, wa)」、「目的(kunine, kuni, kus)」、「付帯状況・様態(no, wa)」、「推定・比況(kotom, pokon)」、「程度(pakno)」、「条件(cik, cikanak, cikanakne, yak, kor, akus)」、「譲歩(yakkay, hike)」、「逆接(korkay)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。

第6章では、「接続助詞＋補助動詞」型の助動詞的形式に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言のこの種の形式を意味、機能によって「時間表現(kor an, wa an, tek an, kan an, ka an, kan iki, wa oman, wa ek, wa okere, wa isam)」、「推定・比況(kotom an, pokon an, kotom iki, kotom ne)」、「受益(wa kore)」、「命令(cik pirka)」、「許可(yakkay pirka)」、「伝聞(yak a-ye)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。また、この分類に入れにくい少数の形式(wa inkar, wa inu, wa ama)についても記述している。

第7章では、「形式名詞＋補助動詞」型の助動詞的形式について、先行研究をまとめ、形式名詞 ru, sir, haw, hum それぞれについて十勝方言の関連する形式を実例に基づいて記述している。。

第8章では、アイヌ語の終助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の終助詞を意味、機能によって「伝達(ne, na, wa)」、「命令(ani, yan)」、「勧誘(rok)」、「疑問(ya, he)」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。

以上、本論文は、アイヌ語十勝方言の助詞の全体像を体系的に提示したものであるが、それと同時に、他方言も含めた先行研究に十分に目配りすることにより、アイヌ語の助詞記述一般に関する一つのモデルを提供するものである。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 佐 藤 知 己

副 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 教 授 津 曲 敏 郎

学 位 論 文 題 名

アイヌ語十勝方言の助詞

序章では「助詞」の定義を、先行研究の慎重な検討に基づいて行い、取り扱う対象を明確にしている。その結果、これまで助動詞、後置副詞として一般に扱われていた形式も広義の助詞として扱うことを述べ、併せて助動詞的な機能を果たす連語的表現も対象とすることを述べる。これにより、本論文はアイヌ語の助詞記述の一つのモデルを提示したものである。

第 1 章では、アイヌ語の助動詞に関する先行研究をまとめ、それに基づいて十勝方言の助動詞を純粹の助動詞と、助動詞的に用いられる動詞とに分類し、さらに意味、機能によって「時間表現」、「推量表現」、「当為表現」、「意志表現」、「願望表現」、「受益表現」、「程度表現」、「否定表現」、「命令表現」、「可能表現」に分けて、個々の形式の用法を実例に基づいて記述し、また、この分類に入れにくい少数の形式についても記述している。注目すべき指摘の一例としては、従来、接続助詞として記述されてきた kan という形式に助動詞としての用法があり、南西部方言の kane と意味、用法的に良く対応することを初めて指摘していることがあげられる。

第 2 章では、アイヌ語の格助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の格助詞を意味、機能によって「位置・方向」、「様態」、「限定」、「程度」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。南西部方言とは異なる点に関する重要な指摘の一例としては、esoro という形式が、南西部方言でよく言われているような川を軸とした下方ではなく、専ら垂直方向の運動に関してのみ用いられることを指摘していることがあげられる。

第 3 章では、アイヌ語の後置副詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の後置副詞を意味、機能によって「位置・方向」、「道具・手段」、「共同」、「原因・理由」、「様態」、「意志」、「数量」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。興味深い指摘の一例としては、格助詞の peka と形が類似しているが、意味、機能が大きく異なる pekano という後置副詞が十勝方言に存在することを指摘していることがあげられる。

第 4 章では、アイヌ語の副助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の副助詞を意味、機能によって「提題」、「例示」、「追加」、「並列」、「限定」、「不定」、「否定」「文

全体のモダリティーに関係する副助詞」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。これらの形式に関しては、他の方言では既に指摘されているが、十勝方言でも一部の副助詞が情報の焦点を示す機能を有する可能性を指摘している点が注目される。

第 5 章では、アイヌ語の接続助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の接続助詞を意味、機能によって「時間表現」、「原因・理由」、「目的」、「付帯状況・様態」、「推定・比況」、「程度」、「条件」、「譲歩」、「逆接」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。なかでも、同時性を表す kan という形式が程度を表す用法を有することを指摘していることは、この形式の機能や歴史を探る上で重要な視点を提供するものと言える。

第 6 章では、「接続助詞＋補助動詞」型の助動詞的形式に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言のこの種の形式を意味、機能によって「時間表現」、「推定・比況」、「受益」、「命令」、「許可」、「伝聞」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。また、この分類に入れにくい少数の形式についても記述している。中でも、継続を表す kor an という形式が十勝方言では一人称と共起しないことを初めて指摘した点が注目される。

第 7 章では、「形式名詞＋補助動詞」型の助動詞的形式について、先行研究をまとめ、形式名詞 ru、sir、haw、hum それぞれについて十勝方言の関連する形式を実例に基づいて記述している。なお、これらの表現が情報構造と深く関わっている可能性を指摘しているのは、本質を突いた見方と言え、これらの形式の研究に新たな可能性を開くものである。

第 8 章では、アイヌ語の終助詞に関する主な先行研究をまとめ、それらに基づいて十勝方言の終助詞を意味、機能によって「伝達」、「命令」、「勧誘」、「疑問」に分類し、個々の形式の用法を実例に基づいて記述している。注目されるのは、先行研究では十勝方言（本別方言）の勧誘の助詞としては na が報告されているのみであり、南西部方言と形が類似した rok という形式が本別方言にもあるという報告は、興味深い発見の一つと言える。

本論文の主要な研究成果は、1) 体系的な調査によって、アイヌ語十勝方言の助詞及び関連する形式の全体像を初めて明らかにした点、2) 先行研究を十分にふまえ、他方言の用法と対照しつつ、これまで気が付かれていなかった十勝方言の助詞及び関連する形式の種々の微妙な特徴を明らかにしている点、3) アスペクト、モダリティーに関する多種多様な形式について、豊富な用例に基づいてそれらの用法を記述している点、の三点にまとめられる。

以上に基づき、全体として本論文はアイヌ語の助詞を包括的に扱った研究として、また、先行研究の少ないアイヌ語十勝方言の記述的研究として高く評価し得るものと言いうことができる。と判断され、当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと全員一致して認めるものである。